

点描

北海道50年の歩み—真宗同朋会運動— No. 9

1965
昭和40年

教区駐在教導・帯広別院輪番として教区の教化に生涯を捧げられた中田正二師

教区定例法座

座談を取り入れた青壮年定例

北海道教区における真宗同朋会運動を推進すべく、布教団をはじめとする教区の組織を発展的に解消して組織された「教学委員会」では、布教部を設けて定例線の運営の強化充実を主務とした。

また、布教部長の寺本護宗師を中心に、一九六四年(昭和39)、真宗同朋会運動の実践にあたる組織として「布教使連盟」を発足させている。初代理事長は金石精導師。布教使連盟は総力を挙げて定例線に協力する体制を整えた。

一九六五年(昭和40)、その施策として立案されたのが、「同朋会定例」である。その実施のために教区内に数度にわたって要望調査を行って立案され、線自体も抜本的に見直されている。実施にあたっては、その内容をより明確化するため、「青壮年定例」とされた。

その目的は、「熱い風が頭の上をスツと通り抜けた感じ、と一部に

地につけたものにした」とある。

巡回講師は、教学委員会において厳選された人に限定し、同朋会北海道教区講師と位置づけられた。

また、テキストは「正信偈(『現代の聖典』)。講義にはテーブル、黒板を活用し、質疑の時間を設けることが望ましい」とされている。

真宗同朋会運動の進歩的な面として評価されたのは、門徒が直接聖教にふれることにあつた。そのため、本堂に照明が加えられ、高座が消えて黒板とテーブルが置かれたと言われるが、青壮年定例はまさにその実践であつた。

また、運動の生命線でもある座談会を設けることが提言されている。

宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌のお待ち受け事業、真宗同朋会運動中期教化研修計画の一つとして、参加者の語り合いに重きをおく「親鸞聖人講座」がある。これは運動がいかに浸透したのかを反映する事業でもある。

*

当時、同朋会駐在であつた中田正二師は、青壮年定例の実施後一年を振り返り、「青壮年定例によ

せて」と題した一文を『北海真宗』に掲載している。

「青壮年特伝が実施せられても、やはり寺族が参加せられていか、いけないかで門徒の受ける感じが非常に違う。……

定例の内容にふれて見よう。通年が三〇カ寺、季節が六〇カ寺あり、その内容には違いがあるが平均して年齢層が高い状況で、この点にも大きな問題があり、大方住職の年齢層に似通っているようにも思われる。……座談会に重点を置かれているのがこの定例線の特徴で、お互いに自分を通して法を明らかにして行くのです。この座談会は質疑応答ではなく、みんなで話し合つて行ける広場で、そこから自然に自己の問題の解決の糸口を見つけていくのが座談会の主眼であり、生活の事実を通して聞法することが親鸞聖人の人生観であり、そこから出発があるので。……大きな眼でこの青壮年の一年間の歩みを見ると努力と勇気と決断とによって、小さな歩みながら大きな波紋が投げかけられていると申しても過言ではありません。」